

が生徒や父母の共感を呼んでいる。

改革の中心だった漆さんは、六年前に校長に就任した。従来も副校長としてリーダーシップを発揮してきたが、立場が変われば自覚も変わる。とたんに体の不調に見舞われた。

「難聴になるなど、ストレス性の病気で入院もしました。校長になって二カ月目、鍼灸師さんから『このままでは体が仕事をさせてくれませんよ。休むことを仕事としてください』とアドバイスされました」

意気込みが空回りしたら

原因ははつきりしていた。「校長とはこうあらねばならない」というセルフイメージに縛られ、無理を重ねたせいである。たとえば、いかなるときも学校と一体化していなければならぬ、何があっても恐れてはならない、怒ってはならない……。

品川女子学院校長の漆紫穂子さん（五一歳）は創立者の曾孫である。大卒卒業後、他校で教職に就いていたが、学校の経営危機と副校長をつとめていた母の病気を機に品川女子学院へ戻ってきた。

その後、大胆な学校改革を進めたことで同校は多くの入学希望者を集める人気校に変身し、偏差値も急上昇。「二八歳になったときに自立している女性を育てること」を教育目標として掲げ、企業の現場や伝統文化に触れさせる独自の教育スタイル

のではなく大切なものと考えよう」そのうえで「怒りや恐れをいったん保留することを心がけた」という。まずは感情のもとにある自分の価値観を自覚し、肯定する。そして行

たとえば トライ アスロンに 挑戦する 漆紫穂子・品川女子学院校長



Shihoko Urushi

り方を模索している。「やることなすこと、すべて裏目に出るときがあります。気持ちほとんどん落ち込みます。その出来事を思い出すだけで暗い気持ちになる。そんな『負の循環』から抜け出すためのコツが見つかりそうなのです」

どういうことか。

「仕事以外で、到達不可能なくらいの目標にチャレンジするということなんです。私の場合はトライアスロンに挑戦しました。一歩踏み出してみたら不思議なほどよい偶然が重なり、仕事もプラスに回転し始めました」

実は競技成績のほうも順調に伸びている。今年なんと「トライアスロンの年齢別日本代表に選ばれてしまったんです（笑）」。戸惑い気味に漆さんがいう。これなら、スランプからの脱出にもかなりの効果が見込めそうだ。

「私はどうしてクヨクヨしたり、イライラしたりするのか？ カツとずるのほどういうときか？ 大人が子供より自己都合を優先していると感じるときではないか。だとしたら、その底には『生徒や卒業生が何よりも大事だ』という思いがある。それは私にとって譲れない価値観だ。ならば、どんな私の感情も、否定する

動に移すときは、一拍置いて、相手にどう伝わるか（結果）を考える。このように自分の意識を無理に抑え込まないようにしたこと、体の不調もやがて解消に向かったという。漆さんはいま、「仕事のスランプから仕事以外の方法で抜け出す」や